厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）
分担研究報告書

NADM に対する化学療法と分子標的薬に関する研究（実施研究課題名）

研究分担者　下村昭彦
国立国際医療研究センター
乳腺・腫瘍内科/医師 兼 がん総合内科/医長

研究要旨　本研究では国立国際医療研究センターで診断・治療を受けた悪性腫瘍を発症したHIV患者を対象に、その臨床病理学的特徴を検討した。HIV感染者のうち、悪性疾患と診断された患者は合計237例であった。男性患者は225例であった。ADMと診断された症例は102例（43.1%）、NADMと診断された患者は135例（56.9%）であった。HIV感染が悪性疾患の治療に与える影響を明らかにするためには、さらなる解析が必要である。

A. 研究目的

HIV(human immunodeficiency virus)感染者は非HIV感染者と比較して悪性腫瘍の標準化発病率が高い傾向にあることが欧米で報告されているが、本邦のHIV感染者を対象とした調査結果の報告は乏しい。また、HIV感染者に対して癌治療を施行した際の忍容性および生命予後に関する報告は乏しく、その実態は明らかでない。本研究では2011年から2020年の期間、国立国際医療研究センターで診断・治療を受けたHIV患者を対象に、その臨床病理学的特徴、癌治療の内容・忍容性・予後等を検討する。

B. 研究方法

臨床情報および検体情報を収集し、腫瘍診断から死亡・最終追跡日までの期間を考慮した統計解析から累積死亡率を算出し、予後リスク因子を同定する。また、悪性腫瘍の診断・治療効果と関連する因子を同定する。さらに、診断・治療に伴う有害事象率を算出し、その関連因子も同定する。

（倫理面への配慮）
国立国際医療研究センター倫理審査委員会承認済み（承認番号：NCGM-S-004317-01）。

C. 研究結果

HIV感染者のうち、悪性疾患と診断された患者は合計237例であった。男性患者は225例であった。ADMと診断された症例は102例（43.1%）、NADMと診断された患者は135例（56.9%）であった。ADMと診断された患者のうち、非ホジキンリンパ腫55人（53.9%）、カポジ肉腫44人（43.1%）、浸潤性子宮頸癌3人（3%）である。NADMで最も多い癌種は大腸癌（14.1%）、次いで肛門管癌（11.1%）であった。2011年から2021年にかけてADMの割合が減少するという明らかな傾向がみられた。2020年から2021年に診断された悪性腫瘍の約70%がNADMであった。

D. 考察

症例のほとんどは男性で、2011年から2021年にかけてNADMの割合が増加した。増加傾向は海外の先行研究と同様であった。NADMの中で最も多い癌種は大腸癌であった。また、NADMはADMに比べ、CD4細胞数が多く、HIV RNAコピー数が少なく、高齢で診断されることが多かった。胃癌の頻度（10%）は諸外国の報告より高く、日本の非HIV感染者集団と同じ傾向であった。

E. 結論

HIV感染者における悪性腫瘍は年次推移とともにADMが減少し、NADMが増加した。症例のほとんどは男性であった。NADMの中で最も多い癌種は大腸癌であった。HIV感染が悪性疾患の治療に与える影響を明らかにするためには、さらなる解析が必要である。

F. 健康危険情報

G. 研究発表

１．論文発表
なし
２．学会発表
ESMO Asia Congress Dec/2nd/2022, Singapore (Poster presentation 441P)
（発表誌名巻号・頁・発行年等も記入）

H. 知的財産権の出願・登録状況　（予定を含む。）

１．特許取得
２．実用新案登録
３．その他